

てをされたのも当時としては仕方なかった。又村の石高の決定も検見（石盛）の際の外交如何では、甚だしい差異があったので村によっては年貢の厳しきは甚だしいものもあった。

次にわが大和町川上地区（小城藩）の年貢米を村別にあげておく。

〔佐嘉郡佐保川島郷の年貢米で嘉永六年（一八五二）大小石高配分帳による〕

一、物成 二九三〇石	
地米 三六七石三斗三升〇合	平野村
東山田村	地米 九一石五斗二升七合
東山田村	二八五 八一五
下山田	下戸田
下山田	七五 三九六
今山	平田
今山	一七八 〇八四
大願寺	於保
大願寺	一五八 八四一
下村	佐保
下村	二七〇 一七八
江熊野	檀田
江熊野	二九一 五九七
今古賀	久留間
今古賀	三七一 〇三三
上戸田	池上
上戸田	六〇 〇 〇 〇
	吉富
	吉富

四、享保の飢饉

江戸時代の佐賀藩領は台風、洪水や干魃による凶作は度々であったが、凶作のために餓死者を出したのは享保十七年（一七三二）の大凶作によるものである。この飢饉は厳しいもので、この年が子年に当たっていたので「子年の飢饉」と言い、多くの餓死者を出した。

この飢饉の概要をまとめた「郷談隨筆」の中に「凶年記」として次のような内容のものが記してある。『享保十七年六月中旬（新曆八月月上旬）の頃、筑前には螟が発生し、田園を食い荒しているとのうわさが伝わったが、七月上旬（新曆八月下旬）になると砂をまいたように発生した。それを防除するのに田の水面に油をふって虫を水下に追い流し、そこに大きな布の袋を当てる流し落ちる虫を受け入れた。しかし袋に一杯になるほど集めても、虫は次々に湧くように発生した。とうとう百姓の精魂が尽きて、田を見捨ててしまい、ただ食物を求めて東西に走りさまようことになった。虫の防除のために鯨油を始め油の類は高値になったが、米も一日ごとに高値になり、諸国も穀物の津留（他国への移出を禁ずる）を行ったので、他国よりの買入れができず米の流通は止つたのである。

やがて食物が底をついてくると、そばの花・くず根の糠・粟のひりぬか・つちの粉・なすの葉・だんとくの根などが食物としてあさられた。十月下旬には領内十一か所に粥場が設けられ、貧民らは群がり集まったが、ようやく粥場までたどり着いて落命する者も多かった。死者は寺院に送って葬ったが、田

舎になると行き倒れの死骸が田野路傍に積み重なった。十一月になると盗賊が多くなり、殊に社寺の鐘、半鐘、仏具等が盗まれるようになった。米穀の値上がりによって一般の物価は下落し、平常の十分の一になったため、他領から船が来ては珍宝や衣服盗品を買い取っていった。十月（新暦十一月下旬）から降り出した雪は翌年三月まで消えず、珍らしい厳寒の冬を迎え、この飢饉のために落命する者は数を知らぬほどに多くなった。十二月、ようやく幕府貸下げの米穀が佐賀藩にも割当てられたが、中以下の者まで潤すことはできなかった。享保十八年の春になり、老少は菜を摘み蓮の根を掘り、榎の若葉やいちじくの若葉を食べた。しかしその悪食の結果は、やがて三月ごろから疫病が流行して四月・五月に及び、枕を並べた病人で十人に三人は落命した。幕府の廻米がふえ麦が出回ったのは四月ごろからであり、ようやく飢饉は脱しかけたけれども、種籾は食いつぶし、牛馬も大かた死んでおり、田畑の荒廃はひどかった。』

とあり、この凶年記で大体的様子を知ることができる。この飢饉は西日本一帯であったが、肥後・薩摩・筑後・島原辺りでは津留をおかしても米穀を売出す者があつたらしく、このことは飢饉が佐賀藩領のようにまではなかったのを示している。

佐賀藩は温暖な気候と肥沃な田地に恵まれていたので、度々の台風や洪水、干魃による凶作でも切り抜けて来たが、凶作のために餓死者を出すに至ったのは享保十七年（一七三二）の大凶作による飢饉がただ一回であつたらしい。わが佐保川島郷（旧川上村）も例外ではなかった。時の大庄屋中原只右衛門



平野の餓死塔

尉正純は郷内庶民の苦しみを哀れみ、米倉を開放して難民に粥を与えた。一粒の米はおろかあらゆる物を食べ尽くし、餓死寸前の難民達は当部落（平野）に群がり集まって、一杯の粥の恵みを受けたが、ようやく粥場までたどり着いて落命する者も多かった。

享保十七年の凶作の程度は、同十八年十一月の幕府への書上（報告書）によって知ることができると、それによると、落米（収穫できなかった米）は七十三パーセント弱となっている。又享保十七年「御蔵入御物成目安」によると落米が八十一パーセントとなっている。これは佐賀藩の蔵入が佐賀平野に多いため、損耗率が全藩より高くなっているわけだ、佐賀平野の被害が他に比して甚大であったのである。この飢饉のための粥場が廃止になっ



久留間の餓死塔

たのは、享保十八年九月のことで、このころになってようやく危機を脱し、安定を取戻したと思われる。この飢饉で佐賀藩は一挙に八万の人命を失ない、多数の牛馬をなくして田園は荒廃し、幕府に対しては多大の借銀と借米を負うこととなった。享保十六年の佐賀藩の人口は三十七万に達していたが、飢饉のすんだ翌年の享保十九年には二十九万に減り、比率では二十パーセントの人が飢饉の犠牲となったのである。この大飢饉の影響は六十余年を経てもなお回復せず、寛政のころまで荒れた地が残っていたと言われている。

平野部落の西方に俗に「ううじよう屋敷」と呼ばれる所がある。これは大庄屋敷の意で、ここが大庄屋であった中原只右衛門の屋敷跡と言われている。更にその南方に「倉前」の地名が残っているのは、恐らく郷内の納米を入れる倉庫が建てられていたのではないかと思われる。

餓死塔

大庄屋中原只右衛門尉正純は大飢饉の危機を脱すると、佐保川島郷内の餓死者供養塔を平野の龍徳院に建立したのが今日も残っていて、その塔の正面に

佐嘉郡佐保川嶋郷内
九男女貳千六百四十餘人餓死塔
無主孤魂無邊幽靈等

と記してあり、左側面から右側面にかけては、漢文で左記のような意味の碑文が刻まれている。

『享保十七年より同十八年にわたり五穀みのらず飢饉となった。』

藩主も倉庫を開いて救援米としたが救うことができない。諸国、貴賤を問わず飢に苦しみ、ついに餓死

者の屍は路に重なり合い、その数は数千に及び何とも施す術がない。茲に中原只右衛門正純は佐保川島郷のために救援に尽くしたが力が及ばなかった。そこで郷内餓死者の魂を弔うために、ここに餓死塔一基を建立した』

更に、餓死塔の左側には同じ施主によって天明四年（一七八四）に大乘妙典一千余部を納め供養した塔も建てられている。この龍徳院は慶長のころから約三百五十年間続いている寺院であるが、現在は中極の宝田寺が兼務している。三十数年前までは餓死塔供養の草相撲が毎年行われていたが今日はそれもなく忘れられたままである。

又、久留間の曹洞宗蔵福寺の旧境内にある餓死塔は高さ約一メートルで、正面に「餓死諸亡霊塔」と刻まれ、右側面に宝暦七年（一七五七）十一月十五日当寺の得容和尚建立と刻んである。同寺では毎年餓死者の供養を行っている。

五、藩政時代の偉人

1 成富兵庫茂安と石井樋

(1) 茂安の功績

封建社会の基盤は農業であったので、幕府を始めとして大名も武士も農業を大切にし、水利事業等には特に力を注ぎ、今日までその恩恵を受けているものも沢山ある。その一つに石井樋がある。佐賀藩で